く、地形は急峻で、降雨量も多い。日本で問題を解決していれば、同じ技術を適用してスイス国民を守ることができると思ったからである。
立山砂防で発見したことは、減災するための持続的な方法があること。日本は非常に環境にやさしく、効率的な建設方法をとっていることに感銘した。重要なことは持続可能性と、社会的、環境的、経済的３つの側面からの均衡性を守ること。立山砂防は完璧な均衡が取れている。

西村　立山砂防を見て、スイスと似ている点、また違っていると感じたことは？

ゲッツ　立山砂防は集水域全体を統合的に捉え、点から線、さらに面を考えている。スイスの先人は「我々は自然と闘う」という姿勢。立山では「自然に敬意を表して従う」という姿勢。私にとって新しい考え方であった（Sustainable Actions Basin Oriented）。

西村　集水域全体を捉える日本の考え方は、外国に輸出できる考え方である。

大井　今年6月のリオ＋２０（国連持続可能な開発会議）の２６の合意の中に防災が含まれたように、世界的に防災がますます重視されるようになってきた。リオ会議の演説で玄葉外相が「持続可能な社会を目指し自然と調和した社会・文明のあり方を考えたい」と述べ、「世界中での防災に対する関心の高揚と、強靭な社会づくりの支援」、「強靭で持続可能な都市づくりの支援」を約束した。防災重視に加え、自然との調和など砂防に通じるものを感じた。このような防災重視の世界的流れや政府の方針は、立山砂防を「防災のモデル」として世界遺産登録を目指す上で追い風になると期待している。

石井　過去３年のフォーラムで、スチュアート・スミス氏（国際産業遺産保存委員会事務局長）からは「立山の砂防は人類の創造的才能を示す傑作」、ゲッツ氏からは、「これほどすばらしい例は世界中で見当たらず、集水域全体を面としてとらえた総合的なシステム」であると言っていただいた。立山砂防は防災とエコ（自然との共生）を共に実現していることをアピールしたい。

西村　確かに立山カルデラでは見事に周辺の自然が戻ってきている。世界遺産の石見銀山は現地に銀がなく歴史的な建物も少なく、分かりにくいと国際社会から指摘された。しかし、石見銀山では公害の歴史がなく自然がそのまま残っており、そこがすごいと逆にアピールした。論理をどう構築するかが大事である。

青柳　飛越大地震の後、様々な人々が努力し、地震が発生する前より安定した状態にしようとした。泥谷、白岩、本宮の各砂防堰堤はこうして造られた。歴史的な経緯を住民がいかに認識するか、つまり「砂防コンシャスネス」を盛り上げていくことが大切である。そして、西村氏が指摘した３つの課題を取り込んでいけば、必ず世界遺産に登録されると考える。

南　災害は忘れたころにやってくると言われ、来ないと忘れてしまう。近年あちこちで土砂災害が発生し、辛い思いをされた人が多い。過去にそういう思いをされてきた富山の人たちの安全･安心を守る立山砂防の世界遺産登録に向け、我々としても全力で支援していきたい。

ゲッツ　国際的な最大の問題は、ヨーロッパでＳＡＢＯという言葉を知っている人が少ないことである。同僚などには「砂防は総合的リスク管理」だと説明しているが、ＳＡＢＯという言葉をいきなり使うと難しい。「ＳＡＢＯ」をどう表現するかが重要。スイスでリスクについて一般の人と対話することは大変難しい。過去の災害の記憶はあまり長続きしないからである。スイスでは自然災害に関する住民の記憶は７年程度と言われる。

大井　砂防は最も強靭で持続的な防災である。大災害で流出土砂が多いほど多くの土砂を調節し、効果を発揮する。砂防は自然の回復など、持続的な防災を目指しており、砂防をアピールする際にはこれらの点も強調するとよい。

青柳　地震学にはテクニカルタームとして日本語が多く取り入れられている。砂防の分野でも日本の技術や考え方が進んでいることは明らかだから、今後は、広報をどれだけ効果的に行うかが大事である。

石井　昨年東日本大地震が起こり、世界全体が防災の大切さをあらためて深く認識した。防災は時代のテーマ。そういう意味では、５年前に立山砂防を「防災大国日本のモデル」と打ち出した当時に比べ、このコンセプトの重要性が一層高まっている。地元の盛り上がりという点では、立山・黒部ゆめクラブや立山砂防女性サロンの会という素晴らしい会があり、世界遺産登録に向けて共に頑張ろうと考えている。

西村　砂防は世界に貢献できるというストーリーを導き出すことによって、世界の人たちに納得してもらえるはずである。

世界遺産フォーラム2012報告書【概要版】

世界に誇る富山の文化遺産

○ 期　日　平成２４年（2012年）７月２９日（日）
○ 場　所　砂防会館別館シェーンバッハ・サボー（東京都千代田区平河町2-7-5）
○ プログラム

第１部…世界遺産の現状と課題
基調講演　世界遺産の現状と課題　大和　智　文化庁文化財部文化財鑑査官
講　　演　立山賛歌　青柳正規　国立西洋美術館長

第２部…富山が世界に誇る「防災遺産」
講　　演　富山県の世界遺産の取り組み　石井隆一　富山県知事
パネルディスカッション　富山が世界に誇る「防災遺産」
コーディネーター　西村幸夫　日本イコモス国内委員会委員長
パネリスト　青柳正規　国立西洋美術館長
アンドレアス・ゲッツ　スイス環境庁次官
大井英臣　元国連防災機関職員・JICAアドバイザー
南　哲行　国土交通省水管理・国土保全局砂防部長
石井隆一　富山県知事

世界遺産フォーラム実行委員会
（事務局：富山県知事政策局、土木部砂防課、教育委員会生涯学習・文化財室）

○基調講演　大和　智氏（文化庁文化財部文化財鑑査官）

世界遺産の現状と課題

●世界遺産条約の目的は文化遺産と自然遺産を保護し、将来にわたって保存するため、国際的な協力、援助の体制を確立することにある。現在、世界遺産の総数は９６２件（文化７４５・自然１８８・複合２９）で、わが国からは１６件（文化遺産１２・自然遺産４）、暫定一覧表には１２件が記載されている。

●世界遺産の数の増加に伴い、全体の質の低下、管理能力の限界、地域、文化圏や遺産の種類のアンバランスが問題視されている。評価基準についての議論もある。世界遺産登録後も持続的に保全管理ができることが大切である。

●富山県の世界遺産「五箇山の合掌造り集落」は、周囲の自然環境とマッチしたユニークな建築様式や住民の意欲的な取り組みが評価された。提案中の「近世高岡の文化遺産群」は、まちづくりへの活用など先進的な取り組みが行われている。
今後、国際的な広い見地から価値を発信していくことが求められている。

●重要文化財である立山カルデラの白岩砂防堰堤は技術力と歴史的な価値が高く評価されている。文化圏の異なる世界の人たちに、どうアピールするかが今後の課題と言える。

●現在ユネスコでは、世界遺産の多い国からの推薦は２件を上限とし、うち1件は自然遺産とするといった数の制限がなされている。多様な文化を反映し、バランスの取れた信頼性のある世界遺産登録が求められている。

●どういったものが世界遺産にふさわしいかを把握し、適切に管理するため、課題と真摯に向き合うことが重要であり、景観保全やコミュニティの強化など、遺産の管理と連携した地域の取り組みが必要となっている。

○講　演　青柳正規氏（国立西洋美術館長）

立山賛歌

●富山県は５０キロの距離に４千メートルの標高差のある希有な地形で、年間最大６千ミリ以上の降水があり、立山室堂では８メートルもの積雪を記録している。急峻な山岳と大量の降水が生み出す世界にも類例のない自然環境である。特殊な自然環境から生まれた山岳信仰や美しい景観、自然との共生のための工夫を凝らした生活などが特徴ある文化と言えるが、これだけでは世界的な特徴とはならない。

●白岩砂防堰堤が造られ、畏怖の対象だった自然を理性的にコントロールできるようになった。ここには、平野の暮らしの安全を守る土木技術が結集している。信仰、砂防、発電といった文化と希有な自然の結節点が白岩砂防堰堤である。世界的にも卓越しており、これらをきちんと整理して訴えていくことが大切である。

●世界遺産登録にはヨーロッパ中心主義の考え方があり、奈良の法隆寺や東大寺の世界遺産登録の際、ヨーロッパの学者の中には修復工事などで建築物の部材が入れ替わっていることを指摘する声があった。法隆寺が世界最古の木造建築であることを証明するため、１９９４年に奈良で世界会議を開き、奈良宣言を採択し、事後的に建築物の部材が入れ替わっても、最初の段階での真正性が守られていることを証明した。

●物質的永続を追求する「蓄積文化」に対し、建築物を修復しながら保存する日本特有の「循環文化」が認められつつあるが、まだ十分とは言えず、今後世界遺産のコンセプトとして受け入れられるよう、働きかけていく必要がある。

●登録推進に向けた活動の過程において、自分たちが住む地域の自然や文化の特質を他と比較しながら理解するようになることから、ある程度時間をかけ、皆で気持ちを共有し、登録へ向けて機運を高めることも大切である。

○講　演　石井隆一（富山県知事）

富山県の世界遺産の取り組み

●立山カルデラ一帯は多雨多雪で土砂が流出しやすい条件が重なった世界に類を見ない過酷な自然環境にある。ここを源流とする常願寺川は、延長５６キロを約３千メートルの標高差で一気に貫流する世界で最も急流な河川である。

●１８５８年（安政５）、安政の大地震でカルデラ内の大鳶山と小鳶山が崩壊し、大土石流となって富山平野を襲い、死者１４０人、負傷者約９千人を出したとの記録がある。このときカルデラ内に残った２億㎥の崩壊土砂の影響で、それ以降、常願寺川では水害が頻発した。治水砂防予算の確保の必要性から、明治１６年、富山県は石川県から分県、明治２４年には県予算の８１％を治水砂防費に充てた。

●県が招聘したオランダ人技師、デ・レイケ氏はカルデラの崩壊を見て「山を全部銅板で覆う必要がある」とまで言ったとされ、明治３９年に県営で砂防事業を開始したが、1県で担うには限界があり、大正１５年に国の直轄事業となった。

●平成１９年に「防災大国日本のモデル―信仰・砂防・発電―」として、白岩砂防堰堤などを世界文化遺産へ提案したが、平成２０年、世界遺産暫定一覧表候補の文化資産と位置づけられ、砂防施設については課題が特に注記された。それらを踏まえ、国際的な評価の検証・確立などを目指す取り組みを開始。有識者を招いて連続３カ年、国際砂防フォーラムを開催してきた。また、平成２１年には白岩砂防堰堤が砂防施設としては初めて国の重要文化財に指定された。

●このフォーラムでは、これまでの成果を報告するとともに、引き続き、「立山砂防が人類の創造的才能を示す傑作」であるといった、その顕著な普遍的価値の国際評価の確立を目指す。また、今後は、白岩砂防堰堤に続く新たな重要文化財指定に向け、本宮砂防堰堤や泥谷砂防堰堤群の歴史的な価値の調査・検証を進める。

○パネルディスカッション

コーディネーター　西村幸夫（日本イコモス国内委員会委員長）
パネリスト　青柳正規（国立西洋美術館長）　アンドレアス・ゲッツ（スイス環境庁次官）
大井英臣（元国連防災機関職員・JICAアドバイザー）　南　哲行（国土交通省水管理・国土保全局砂防部長）
石井隆一（富山県知事）

南　日本の砂防の根源には立山砂防で培われた精神があり、土砂災害から国土と国民生活を守るという変わらない目的の下、新しい技術や時代に沿った新しい法律、制度を積極的に導入してきた。大正１３年の砂防法改正に伴い着手された常願寺川の直轄砂防事業は、その厳しい自然条件の中でさまざまな技術を積極的に活用し、防災への絶え間ない努力を長年にわたり行ってきた。砂防は土木工事と自然の営力を重ね効果を発揮するが、泥谷堰堤群がその典型である。いま世界各国で日本のさまざまな砂防技術が活用されており、そのほとんどを立山砂防で見ることができる。

ゲッツ　スイスは１８５０年代に大規模災害が頻発した後、１００年ほど大災害がなく油断してしまった。私は１９８０年に砂防責任者に着任したが、１９８７年に異常災害が発生した。何百という土石流が山岳地帯で発生し、下流では多くの洪水、氾濫、落石が発生した。このような災害に見舞われ、果たしてわが国の戦略はこれでいいのかと疑問視するようになり、私は責任者として日本へ向かった。日本の人口密度はスイスより高